



TITLE:

<批評・紹介>中國科學院山東分院
歷史研究所編「義和團運動六十周
年紀念論文集」

AUTHOR(S):

堀川, 哲男

CITATION:

堀川, 哲男. <批評・紹介>中國科學院山東分院歷史研究所編「義和團運
動六十周年紀念論文集」. 東洋史研究 1966, 24(4): 531-536

ISSUE DATE:

1966-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152704>

RIGHT:

また誤讀が集中的な傾向をもつのは、歴代畫學書を貫通、體系づけることにこだわって、先行諸論文との時代的間隙を埋めようと、草々裡に執筆された結果であらう。論文に精粗の差が生じているのも、このためと思われる。

勿論これらは細部の瑕瑾であつて、全篇の大意には影響がないといわれれば、それまでである。しかし一連の不正確な讀解によつて、原資料に含まれる無數の枝葉・細流を見失つたことも事實であらう。評者はそのことを惜しむのである。

中國畫論の研究は、ともすれば觀念的、獨善的になりがちである。その弊に意を致されて、この「孤獨な研究」(二〇頁)のために、今後明代以降の畫論の展開についても明らかにしていただくよう、心から願つてやまない。

(古原宏伸)

義和團運動六十周年紀念論文集

中國科學院山東分院歷史研究所編

一九六一年二月 北京 中華書局

A5判 二七四頁

本書は、題名からも察せられるように、一九六〇年が義和團事件の六〇周年にあたるため、それを記念して出版されたものである。六一年二月の出版であるから、新刊というには少々時がたちすぎているのだが、どういうわけか、我國に入つた部数はかならずしも多くはなかつたらしく、私自身もついに入手しえずじまいになつた。

この論文集に收められている一六篇の論文は、大きく二つにわけ

ることができる。編集者の説明にもあるように、前半の六篇は、「義和團の反帝愛國の闘争精神を發揚し、義和團運動の性質と歴史的意義を論述し、帝國主義、とくにアメリカ帝國主義の侵略的本性を暴露したもの」であり、残りの一〇篇は、主として「各地域における義和團の英雄的闘争」を記録したものである。

これだけの説明からも容易に想像されるように、そしてまた全體を讀讀した後に受ける印象もやはりそうなのだが、きわめて今日の立場から書かれ、編集されていることに、本論文集の最も大きな特色がある。つまり、現在の立場から、義和團運動のなかに歴史的教訓をもとめ、それを今日の愛國心の發揚に役立てようと企圖していることは明白である。たとえば、巻頭の黎澍「帝國主義的壽命不會很長了」は、まず、義和團運動を、一九世紀末における帝國主義の侵略によつて危急存亡の窮地においこまれた中國に發生した人民の反帝國主義闘争——植民地主義の直接的對立物と規定する。そして義和團が清朝政府の支持を得ず、また得ることも望まずに、人民みずからの力によつて帝國主義の侵略に對抗しようとした反帝愛國の運動であつたことを強調したのち、その英雄的闘争にもかかわらず、八國連合軍および清朝正規軍によつて無慘にも鎮壓されてしまつたことをのべる。そのあと一轉して現在の地點にたち、六〇年を経過した今日においては、世界の情勢が一變してしまつてゐること、帝政ロシアは社會主義國にかわり、ドイツは社會主義と資本主義の二つの國に分裂し、オーストリアは中立政策をよぎなくされ、イタリア・日本はすべての植民地を喪失し、イギリス・フランスも資本主義世界における指導的地位を奪われ、それにかわつてアジア・アフリカ・ラテンアメリカの民族主義は空前の高まりを示し、ま

さに東風が西風を壓する状況が現出していると述べ、現在、資本主義世界を牛耳っているアメリカ帝國主義も、世界人民の中において日々孤立化の度を深めており、帝國主義の壽命も、あまり長くはあり得ない結論するのである。要するに、ここでは、義和團運動という六〇年前の事件が、今日のA・A諸國におけるナショナリズムの昂揚を高らかにうたいあげるための一つの素材として使用されているのである。この場合、素材にはそれだけの十分な價值は認められているにしても、問題の重心は明らかに他の點にすえられている。

しかも、こうした傾向はなにもこの論文のみを例外とするものではなく、強弱の差はあるにしても、ここに收録された全部の論文に共通する基本的な姿勢である。たとえば、丁名楠・張振鵬「從義和團運動看美帝國主義的侵略本性」および朱活・史森欽「揭露美帝國主義在義和團運動期間的血腥罪行」の二論文は、現時點における中國とアメリカ帝國主義とのはげしい鬭争をぬきにしては考えられないであろう。義和團を制壓した八國連合軍のうち、論文の表題の中に國名がやりだまにあがっているのは、アメリカのみである。こういったからといって、別にそれが輕重を失したやり方だなどと文句をつける氣持は毛頭ないのであつて、ただ歴史學の分野も、現今の中國・アメリカの深刻な對立の影響をまともに受けていることを指摘したかったのである。同様のことは、一九五九年六月に出版された「十九世紀美國侵華檔案史料選輯」(上下二冊)についてもいえるであらう。

しかし、現在の觀點(これは政治的觀點といふにしてもよいのだが)が、中國人の論文、それもとくに近代史の論文に尖鋭に表明

されていることは、中國史研究者にとつては、いわば常識であつて、ここでも新しく指摘するまでもないであらう。事實、研究者は、こうした事態に各自なんらかの形で對處しているようにみえる。快哉をきけんでみずからも勇敢にその戰列に加わるのも一つであり、實證的裏づけが不足しているのを理由に、信頼に値せぬものとして無視してかかるのも一つの行き方である。しかし、その中間に、私のようにとまどいを感じながら、ぶざまに右往左往している者のいることも事實である。客觀的であらうとして、なおかつ共感および價值感の混入を排除しえぬ者の悲哀が、そこにはある。そして、このような態度はとくに革命史の研究において、本質的な問題と關連するものなのだ。共感(あるいは反感)をぬきにして行なわれるいわゆる客觀的・革命史の研究に一體どれだけの生産性を期待しうるであらうかという感情、客觀的・實證的であることを求めつつ、その客觀性・實證性なるものが、すでにある體制内のものであつて、必ずしも完全に自由なものではあり得ないのではないかという疑問、それを私自身ぬぐい、さることが出来ないものである。更に、革命史・運動史というきわめて動的なものを、同じ動的な立場から研究すると、靜止した地點から觀察するのとの相違がある。靜的な位置にいてこそ、その研究に客觀性を求め得ると考えつつも、一方では、ともに動き、實踐し、感情を共有する者にしか理解できぬ部分が存在するのではないかという一種の感慨がどこまでもつきまとうのである。

今年の史學會の公開講演で、増井經夫氏が「太平天國の見方」と題して講演され、太平天國に對する評價が、時代によって奇妙に變遷していること、それが時代の動きと無關係ではないこと、を述べ

られた。その話の中で、氏は、どのような假説でも膨大な史料の中から論證しようとするれば論證することは可能だという意味のことを、これはむろん冗談でいわれたのだが、そしてまた、これまでの研究者のあやまちを正そうとする意味でいわれたのだが、私はこの言葉を複雑な感慨をもつてきいたのであった。

わずか六頁半の短い文章であるが、義和團運動を近代史の流れの中に適確に位置づけているのが、劉大年「義和團運動説明甚麼？」である。劉氏は、「太平天国・義和團・辛亥革命は中國舊民主主義時期における三回の革命高潮の頂點である」とのべ、義和團運動は、反封建を主とする太平天国農民戦争とブルジョア階級の辛亥革命という二つの革命のちょうど中間に位置し、反帝國主義を任務としていた點に特色があつたという。この見解は、東洋史研究（二三卷一號）に掲載された「中國近代史研究の諸問題」において、一層明確に體系づけられている。そして義和團運動を、當時における帝國主義侵略の深化、空前の民族的危機の產物としてとらえ、「義和團運動は帝國主義の侵略に反對する愛國運動であり、義和團の進行的戦争は反帝國主義的・革命的・進歩的戦争である。」と結論している。義和團に参加した者は、農民を中心として、手工業者・都市の貧民・失業兵士・水陸交通労働者であるが、眞に運動を體現していたものは農民群衆だけとし、當時、《興中會》や《維新派》のブルジョア勢力は、少くとも主觀的には、反帝國主義の要求を持たなかつたこと、むしろ反義和團的色彩を有していたとのべ、義和團運動の農民と労働群衆による《自發性》を強調する。次に劉氏は、從來のブルジョア歴史家のあやまつた義和團に對する見方に攻撃のはこさきに向け、義和團運動を建設性のない熱狂的反動的暴動

とする見解、キリスト教徒と非教徒の宗教上の衝突とする見解、中國の傳統的排外心理と愚民の迷信の結果とする見解、を否定し、「彼等ブルジョア史家の目的は、帝國主義の侵略的本性をおおいかくし、植民地半植民地の人民と帝國主義侵略者との矛盾を抹殺し、反植民地闘争を緩和せんとしたものである。」と述べている。また劉氏は矢野仁一氏ら日本學者の「義和團は清朝政府の支持の下に發生した。」とする見解、すなわち、「清朝政府が群衆の反抗の目標を他にそらしうとしたため、守舊派の排外感情が政府の對外方針に反映して、その結果義和團事件が發生した。」とする見解（實は、ここにあげられた矢野・白柳・高桑・窪田・小竹・宮崎氏等の説をこのように單純化することには疑問があるのだが）を完全な錯誤であると否定し、義和團と清政府の間の對立性を指摘する。それによれば、義和團は本來《反清復明》を宗旨とする秘密結社であつて、政府はこれに對し常に反逆者として斷固鎮壓の政策をとつており、あとになつて政府が義和團を承認し、ついに各國に對する宣戰にまでふみきるのも、義和團の壓力の結果で、あくまで《表面上》の施策であり、「清朝統治集團と帝國主義はもとより矛盾を持っていたが、しかし、このことは決して政府の農民を敵視し帝國主義に依存する立場に影響を及ぼすことは出来なかつた。義和團の強大な壓力の下に、北京政府と東南地方實力派の間には、表面上分裂の形勢を呈していたが、實際には完全に一致するものであつた。」というのである。

私は、劉氏の意見に、大筋においては同意するのだが、このあたりへ來ると、少々首肯できない點がでてくるのである。私自身、義和團を政府の支持の結果發生したとは考えず、劉氏のいう人民によ

る自發性を承認するのだが、劉氏は何故かくまで徹底的に政府との關係を否定するのであろうか？清朝政府が、義和團の鎮壓にはじめからあまり熱意を示さなかったこと、特に地方官においてそうであったことは、もとより人民と同じ基盤に立つてのそれではなかったにしても、やはり事實として認めなければならない。戊戌政變後の政府内部における改革派から守舊派への主導權の交代、それにとともに中央および地方官における排外感情の増大、そして一時的にせよ西太后一派が義和團によって列強の侵略にあたろうとしたこと、本來結合するはずのない兩者が、ある時點において同じ方向への壓力として働いたこと、これらのことを完全にきりすてしまつては、義和團發生の不可避的な歴史法則性は理解出來ても、同じく劉氏のいう驚天動地の事業をなした義和團の量的擴大の説明がつかなくなるのではないか。こうした政府内部における政策の變化、さらにこの時期における自然災害の襲來という要因をも考慮することによって、帝國主義と中國人民との矛盾、その緊張が、なぜこの一九〇〇年という時點で爆發したかの説明が可能となるのではないか。この事については、「義和團研究序説」（東洋史研究二三卷三號）の中で、義和團運動擴大の副次的要因としてふれているので、これ以上はのべない。劉氏の階級的觀點による見事な義和團運動の説明、それをあまりにも完全なものとするために、氏が錯雜した政治上の動きと、ここにはふれなかったが、義和團運動のもつ缺陷への着目を回避するならば、かえって説得力をうしなう結果になるのではないだろうか。

史思群「論義和團反帝國主義闘争」および袁定中「義和團的反帝國争及其歴史意義」はいずれも、義和團の反帝國争の必然性と歴史

的意義、現時點における反帝國主義運動に對する教訓といった點に、焦點を置いて、義和團運動を素描したものである。前者についていえば、著者は、アヘン戦争以來の列強の帝國主義的侵略、それに對する義和團の武力闘争の正當性を主張し、義和團を無知迷信と暴民のヒステリーの産物と見なす者に對し、「帝國主義は中國人民に一體どのような文明をもたらしただのか？」と反論している。これは私自身、義和團關係の史料を讀んで行く途上で、禁じえぬいきどおりであつた。義和團の無知・野蠻・殘忍性を非難する君達自身が「招かれざる客」ではないのか？本當の政治的目的をおおいくしにおいて、區々たる病院や孤兒院の經營・學校の開設・キリスト教の布教等の「善行」をふりかざし、主人の待遇の仕方が悪いといつて、くつてかかるとすれば、これは全く理にかなわぬことではないか？中國における君達の存在こそが、騷亂の根本的原因なのだ。これは極めて素朴な反論である。素朴な反論であるにもかかわらず、それは義和團時期の帝國主義列強に對して問われねばならなかったと同様に、現在のベトナムにおけるアメリカに對しても、問われねばならない事柄であらう。ただ、著者の當時における各階層の義和團に對する見方の分析はあまりにも圖式的である。運動の展開にそくした、もう少し柔軟な分析を必要とするのではないか？また、運動の末期にあらわれた義和團内部の分裂・暴徒化等の缺陷を、すべて運動の最盛期に地主階級によって自己保身のために組織された「假義和團」および義和團の中に混入した地主分子のせいに歸しているのも、一面的でありすぎるように思われる。ここでも、あらゆる粗惡分子を切りすてたもののみを義和團とする一種の「理想化」の操作がなされているようにみうけられる。

陸景琪「義和團運動在山東的爆發及其鬭爭」は、まず、新末の赤眉・唐末の黃巢以來の山東人民の革命の傳統、日清戰爭後の民族矛盾・階級矛盾の激化、外國商品の流入による家内手工業の破産、汽船の就航・鐵道敷設にともなう交通労働者の失業、日清戰爭後における政府による人民に對する收奪の強化と列強による利權の爭奪、キリスト教布教にともなう宣教師・教徒と中國人民との間の矛盾等、義和團發生の原因を具體的に説明したのち、山東における義和團運動を二つの時期に分けて、その動きを生き生きと描き出している。陸氏によれば、義和團は、元來「反清復明」を主張する白蓮教の傳統を繼承した反封建の秘密組織であったが、一九世紀末の民族矛盾が封建矛盾に優先する状況において、この組織を利用して帝國主義の侵略に對抗しようとしたものであり、「反清復明」から「扶清滅洋」へのスローガンの變化は、その事態を反映したもので、大衆を反帝一本に動員するための政策的なものであったと述べている。また、現存の八十三才と七十七才の老人の口述をもとにして、義和團の「厳格な規律」を強調しているが、にわかに信じがたい點はあるにしても、義和團關係の史料が、大部分支配者側のそれのみに限定されている状態を是正する有益な試みと思われる。

山東師範學院歴史系山東通史編寫組の手になる「山東義和團反帝愛國運動」は、山東における列強の利權爭奪、キリスト教宣教師の罪行、清政府の壓政、日清戰爭後この地方を襲った自然災害等を義和團發生の原因として概説したのち、省内各地における運動の展開を、「反帝愛國の鬭爭」に焦點を置いて、地域ごとにくわしく叙述している。ただ、ここでも、農民階級による運動の「自發性」、「扶清滅洋」が策略的なものであって、實際は反封建的性格が顯著

であったこと、失敗の原因は農民階級の限界性と労働者階級の指導がなかったこと、にもかかわらず、この運動が民族的危機を救い、帝國主義の中國分割の野心を阻止し、封建買辦勢力に大きな打撃を與え、人民をして帝國主義と國內封建勢力が中國人民の不倶戴天の敵であることを認識させた點に義和團運動の意義があったといった方向に結論づけている。このような見事な圖式を前にして、私自身は、義和團運動のもつ缺陷をもうぐり出し、その後のブルジョア勢力による政治改革の試みと辛亥革命後の政治的混亂、そういった點に視點をすえて再検討しないことには、そこに論理の飛躍と矛盾が出て來るのではないかと、幾分心細く感ずるのである。

張寄謙・楊濟安・林華國・黃思駿の共同研究「義和團在北京的鬭爭」、南開大學歴史系一九五六級歴史班の「義和團在天津的反帝鬭爭」、開封師範學院歴史系と中國科學院河南分院歴史研究所の共同研究「義和團運動時期河南人民的反帝鬭爭」、喬志强「山西地區的義和團運動」、黎光「義和團運動在東北」、戴學稷「一九〇〇年內蒙古西部地區各族人民的反帝鬭爭」、隗瀛濤「義和團在四川迅速發展的原因及其特點」等は、これらの地域における義和團の英雄的鬭爭をその地域における特殊事情を加味しながら、具體的に述べたものである。なかでも、「義和團在四川迅速發展的原因及其特點」は、辛丑條約後の四川における排外運動を義和團運動の繼承としてとらえ、運動展開の様子と歴史的意義を指摘しているが、從來の研究においては、ともすれば見落とされていた點だけに、注目にあたいるといえよう。

最後に南開大學歴史系中國近代史教研組の手になる「義和團是以農民為主體的反帝愛國組織」は、「天津地區義和團運動調查報告

中的一章」という副題が示すように、現地調査による古老の談話をもとに、義和團の組織、主要構成員、義和團内部の制度等を記述したもので、義和團研究の新しい分野を開いたものといえるであろう。これまでも現地調査による記録は、一部「近代史資料」等において紹介されて来た。義和團運動を経験した老人といえ、かなりの高齢であらうし、その記憶の信憑性まで考えれば、困難な問題ではあろうが、我々は、こうした現地調査が廣範圍にわたって行なわれ、「辛亥革命回憶錄」のような形で出版されることを期待する。

ここまで、ともかく紹介・批評をして来たのだが、私の傍目八目のなそれが、ほとんど意味をなしていないことを痛切に感ずるのである。本書は六十数年前の事件を叙述したいわゆる歴史の書ではなく、現在の書である。私はこの論文集を読み進みながら、常にベトナムの戦亂のことを考えていた。義和團運動六十年後の八國連合軍の運命は、ベトナムにおけるアメリカの何年後かの姿ではないだろうか？圖式的でありすぎるといつて、たびたび疑問をさしはさんだ諸論文の主張が根底において正當であることを、私はここで率直に承認せざるを得ないのである。

まともな批評が出来ず、單なる感想文に終始したことを、遺憾に思う。

(堀川 哲男)

東洋史研究叢刊

第十四 清朝前史の研究

三田村泰助著
本文 四九二頁 定價 二五〇〇圓

第十三 金朝史研究

外山軍治著
本文 六七五頁 年表一三頁
索引 三〇頁 定價 二八〇〇圓

第十二 中國征服王朝の研究上

田村實造著
本文 四四四頁 定價 二二〇〇圓

右書御希望の方は本會までお申込み下さい

京都市左京區吉田本町京大文學部内

東洋史研究會

振替京都三七二八番